



TITLE:

フロベールの二項性に関する一考察 : OrgueilとFoiの対立について

AUTHOR(S):

佐々木, 順子

CITATION:

佐々木, 順子. フロベールの二項性に関する一考察 : OrgueilとFoiの対立について. 仏文研究 1983, 12: 95-112

ISSUE DATE:

1983-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137668>

RIGHT:

フロベールの二項性に関する一考察

— Orgueil と Foi の対立について —

佐々木 順 子

« Je serai une des colonnes du temple. Après saint Antoine, saint Julien; et ensuite saint Jean-Baptiste; je ne sors pas des saints »⁽¹⁾ とフロベールが述べているように、聖者たちが彼の関心をひき続けたのは何故だろうか。

Orgueil と Foi の対立という観点から、これらがフロベールの作品創造にどのようなかわりをもっているか検討してみたい。

I

フロベールの〈二項性〉については A. ティボーデが«vision binoculaire»⁽²⁾という言葉で表現しているが、様々な言及が見られる。

フロベールの二項性に関する研究は大きく 2 つに分けられると思われる。

1) フロベール個人の考え方に関するもの

たとえば Descharmes は次の箇所と言及している⁽³⁾。

Je n'ai jamais vu un enfant sans penser qu'il deviendrait vieillard,
ni un berceau sans songer à une tombe⁽⁴⁾.

La contemplation d'une femme me fait rêver à son squelette⁽⁵⁾.

2) 作品創造に関するもの

ティボーデが ≪vision binoculaire≫ という場合、個人的な考え方に関するもの ≪Sa (Flaubert) façon de sentir et de penser≫ と、作品創造にかかわるもの (≪la manière de le (le sujet de *Madame Bovary*) traiter≫) との両者を考えていると思われる⁽⁶⁾が、後者における binocularité を発展させたのは Gothot-Mersch である。

Rodolphe est bien à l'opposé de Charles et de Léon, natures molles et ternes. Entre ces trois portraits s'établissent donc, d'une part un parallélisme (Charles-Léon), d'autre part une opposition (Léon-Rodolphe). Nous rencontrerons souvent ces schèmes structurels au cours de notre étude; c'est, en partie, par rapprochements et anti-thèses que Flaubert a composé *Madame Bovary*⁽⁷⁾.

同じような主張は Marie-Jeanne Durry の *Flaubert et ses projets inédits* にも見られる。但し Durry はコントラストによる描写を極力隠そうとする努力が *L'Education sentimentale* には顕著だと述べているが⁽⁸⁾。

Gothot-Mersch も portraits に関するコントラストを研究し、こうした二項性が顕著なのはごく初期の作品だと述べている⁽⁹⁾。

II

それでは orgueil と foi という対立関係はいつ頃成立し、それは作品創造にどのような影響を与えただろうか。またそれはフロベールの考え方とどのようなかわりをもっているだろうか——これらの点について検討してみたい。

I) 成立時期

1849 年の初稿 *Tentation* においてこの対立関係は意識的に作品創造に寄与するものとして成立したと考えられるのではないだろうか。

sept péchés と vertus (charité, foi, espérance) が聖アントニウスを獲得しよ

うと争う場面は有名であるが、Club de l'Honnête Homme 版の scénarios をみると、《L'Orgueil et la Foi le (Antoine) font entrer dans la chapelle⁽¹⁰⁾》、——このシーンは後に《L'Orgueil entre dans la chapelle. La Foi veut l'en empêcher⁽¹¹⁾》に変化し、対立関係がいよいよ顕著になるが——他にも《Duel de la Foi et de l'Orgueil⁽¹²⁾》、《Dialogue entre la Foi et l'Orgueil⁽¹³⁾》など scénarios の段階で対立関係は明らかである。

またアントニウスと Apollonius de tyane (古代ギリシアの哲学者で、あらゆる学問を学んだと自負し、アントニウスと議論をするためにやってくる)の対立場面を創作するにあたり、フロベールは後者を早い時期から《dernier degré de l'orgueil》と規定している。

それではこうした対立関係はそれ以前においてはどのようなになっているだろうか。

1838年の *La Danse des morts* あたりから、キリストが orgueil の化身であるサタンと対立するものとして描かれるようになる。この図式は1年後の *Smarh* においては聖者対サタンの対立関係になっている。

それ以前の作品——例えば *Rage et Impuissance* (1836) では、生埋めにされた Ohmlin 氏は助けがこないことに腹をたて、《se roulant dans sa tombe en maudissant Dieu avec des cris à la bouche et le désespoir dans l'âme⁽¹⁴⁾》神にのろいの言葉をかけるのであるが、この作品には <orgueil> という言葉は一度も出てこない。これはフロベールが foi を攻撃することが orgueil そのものであるということに気づいていないからではないだろうか⁽¹⁵⁾。

キリスト対サタンという図式では foi を攻撃するのも orgueil であると自覚されるようになっている。

フロベールの作品に何故この対立関係がつきまとっているのかについては後に述べるが、ところでフロベールの création において、この orgueil と foi の対立関係が真に作品創造の原動力となるためには、orgueil は人間一般に共通したものであるという認識に立ち、自分自身の orgueil を自覚することが必要なのであるが(一般化)、——フロベールは個人的な事柄をストレートに表現するのではなく、généralisation のカムフラージュのもとに表現する傾向がある——それではこうした傾向に影響を与えたものは何であったろうか。

2) 影 響

先に述べたキリスト対サタンの対立関係は当時流行していた人間の運命に関する詩、小説などの影響があると思われるが（E. Quinet, *Ahasvérus*, 1833 など）、1842年に出版された Saisset の翻訳による『エチカ』の影響を看過することはできない。

Saisset はその出版にあたり、*Avant-propos* で

J'ai pensé qu'une traduction était absolument nécessaire pour donner enfin des amis ou des adversaires sérieux à Spinoza; et j'ai même osé espérer qu'elle pourrait mettre un terme à cette aveugle et stérile controverse qui s'agite depuis 15 ans dans le vide...

とスピノザに対する様々な誤解をとくために翻訳を試みたと述べている。

事実フロベールは Alfred Le Poittevin からスピノザの存在を知ったのであるが、その知識は部分的なものにすぎなかったように思われる。

例えば *Smarh*(1839) を見てみよう。この作品ではスピノザの影響は2つあると思われる。

1) il (Dieu) s'inquiète peu si le vermisseau mange et s'il meurt⁽¹⁶⁾.

—これは第5部定理17の「神はいかなる受動にもあずからず、またいかなる喜びあるいは悲しみの感情にも動かされない⁽¹⁷⁾」の影響による一節であると思われる。

2) Tu es libre? [...] Vraiment non, la liberté n'est ni pour ces astres [...] ni pour toi (Smarh) qui es né et qui mourras, ni pour moi (Satan) qui suis né un jour et qui ne mourrai jamais, peut-être⁽¹⁸⁾.

—「神は意志の自由によって作用するものではない」（第1部定理32系I）⁽¹⁹⁾の影響もみられる言葉であると思われる。（忖意は本来どこにも、神にさえもない）

このようにロマン主義的な色彩の濃い考え方が Saisset 版が出版された後に書か

れた初稿 *Tentation* においては、よりスピノザの影響が幅広いものになっているのであるが⁽²⁰⁾、中でもフロベールの *création* に大きな影響を与えたのはスピノザの *orgueil* に対する考え方である。

— Le comble de l'orgueil [...] est le comble de l'ignorance de soi-même⁽²¹⁾.

— Or tous ceux que j'entreprends de signaler ici dérivent de ce seul fait, que les hommes supposent communément, que toutes les choses de la Nature agissent, comme eux-mêmes, en vue d'une fin⁽²²⁾.

人間はあらゆるものは自分たちの役に立つために存在すると考えている、たとえば目はものを見るために、歯はそしゃくするために、植物や動物は人間を養うためにあるのだと考えているが、それは一つの *préjugé* にすぎないというのがスピノザの主張である。

ものを目的性の観点からながめることを批判するこの考え方は自然科学の発展に大きく貢献したのであるが、フロベールにとってもこの人間中心主義を否定する考え方は多大の影響を与え、対立関係が作品創造へと移行する確たるより所となったと考えることができよう。

たとえば *Smarh* において次のような一節がある。

1) C'est pour nous, vois-tu, que l'éternité est faite, pour nous autres [...] pour moi⁽²³⁾.

2) tout cela est trop beau pour n'être pas fait pour l'homme, pour son bonheur, pour sa joie⁽²⁴⁾.

これらはスピノザの説を知って書かれたとは思えない。

ところで初稿 *Tentation* では

...ce désert, ces montagnes avec ce petit endroit-ci tout exprès pour moi ...⁽²⁵⁾ (下線筆者)

と *Smarh* に似た一節があっても ≪Il se promène doucement, l'Orgueil marche derrière lui dans son ombre≫ という文章が直後に書きそえられている。

ところでフロベールにはスピノザのこの *orgueil* の思想を更に一步進めているように思われる部分がある。

スピノザは次のように述べる。「…これからして動物の屠殺を禁ずるあの掟が健全な理性によりはむしろ虚妄な迷信と女性的同情とに基づいていることが明らかである。我々の利益を求める理性は、人間と結合するようにこそ教えはするが、動物、あるいは人間本性とその本性を異にする物、と結合するようには教えはしない。[…] 実に彼らは本性上我々と一致しないし、また彼らの感情は人間の感情と本性上異なるからである⁽²⁶⁾。」

この点でスピノザは根っからのキリスト教徒であるといえるが、フロベールのこのような考え方は古代ギリシアの輪廻思想から、むしろ東洋の考え方に接近しているだろう。

Je suis le frère en Dieu de tout ce qui vit, de la girafe et du crocodile comme de l'homme⁽²⁷⁾.

III

ところでフロベールは東方旅行からの帰途、コンスタンティノーブルから親友ルイ・ブイエにあてて次のような手紙を出している。

A propos de sujets, j'en ai trois, qui ne sont peut-être que le même et ça m'emmerde considérablement: 1° *Une nuit de Don Juan* à laquelle j'ai pensé au lazaret de Rhodes; 2° l'histoire d'*Anubis*, la femme qui veut se faire baiser par le dieu […] 3° mon roman flamand de la jeune fille qui meurt vierge et mystique entre son père et sa mère, dans une petite ville de province, au fond d'un jardin planté de […] Ce qui me turlupine, c'est la parenté d'idées entre ces trois plans. Dans le premier,

l'amour inassouissable sous les deux formes de l'amour terrestre et de l'amour mystique. Dans le second, même histoire [...] Dans le troisième, ils sont réunis dans la même personne, et l'un mène à l'autre [...] (28)

(下線筆者)

この手紙に見られるように、*Une nuit de Don Juan*, *Anubis* (のちに *Salammbô* になる), roman flamand (のちに *Madame Bovary* になる) は amour terrestre と amour mystique — これは orgueil と foi の対立という二項性に還元されると思われるが — の葛藤として最初に concevoir されているのであるが、この orgueil 対 foi という対立関係は単に二項対立の一つにすぎないのだろうか。むしろそれはフロベールの精神構造に深くかかわっているのではないだろうか。

1) フロベールの foi に関してサルトルはその *L'Idiot de la Famille* の中で父 Achille-Cléophas の scientisme に対し foi を対置しようとする。

フロベールは父親の分析的なまなざしに対抗すべく、父なる全能の神を対抗させることによって、Autre = 父に占領され、passive になっている自分を救いたいと試みるが、結局失敗してしまう。それはフロベールが終局的に神を信じることができなかったからだ、というのがサルトルの主張である。

従ってサルトルが «il ne trouve rien en soi-même qui ressemble à la Foi⁽²⁹⁾» という場合の Foi は全能の神という積極的かつ強い存在者に限られているように思われる。それ故 instinct religieux まで否定しているわけではないのである。もっともサルトルのいう宗教本能とは «une pulsion qu'on retrouve chez tous les membres d'une espèce animale»⁽³⁰⁾ のことであり、«si elle vient à manquer chez quelqu'un, il faut que celui-ci soit un monstre⁽³¹⁾» (下線筆者) という言葉からも、ごく限られた、最も原始的な本能といえるのではないだろうか。

2) サルトルの Foi 論はさておき、フロベールの foi については mysticisme, métépsychose, panthéisme, ascétisme などに言及したものが多い⁽³²⁾が、これら前三者は特に正統派キリスト教のドグマからはずれた傍流というべく、むしろ無意識にその源を発する思想と考えられよう。

それではフロベールの foi にはどのような特徴が見られるだろうか。

Par caprice sans doute, si je suis entré quelquefois dans une église, c'était pour écouter l'orgue, pour admirer les statuettes de pierre dans leurs niches; mais quant au dogme, je n'allais pas jusqu'à lui; je me sentais bien le fils de Voltaire⁽³³⁾ (下線筆者)

端的に言えば、フランス革命後の宗教のない、あるいは理性神を信じる世代に育ったフロベール(fils de Voltaire)にとって、foi は無意識の領域に押し込められ、前に引用した一節からも解るように、「教会」にひかれる自分を「オルガンの音を聞くためだろう」、「多分気まぐれからだろう」と自分に言いきかせているように思われる。

ところで無意識の領域は何かにつけて秘かに意識の領域に侵入してくるものであるが、そのことはフロベールが自分の芸術を宗教的な比喻で表現する場合が多いことから実証されるだろう。

a) ascète, moine に自分をたとえる

b) J'aime mon travail d'un amour frénétique et perversi, comme un ascète le cilice qui lui gratte le ventre⁽³⁴⁾.

c) L'auteur, dans son œuvre, doit être comme Dieu dans l'univers, présent partout, et visible nulle part⁽³⁵⁾.

フロベールの foi は orgueil の皮肉なまなざしによって一つの教義に成長することのできない切れ切れの感情といえるのではないだろうか。そしてそれ自身では顕在化しない foi が orgueil という対立項をえることによって自らを顕在化していく過程——フロベールの création にはこのような意味もあるのではないだろうか。

自我の確立とともに成立したと思われるこの orgueil と foi の対立関係が明らかにフロベールの創作活動の一環になうようになった時期、その成熟の過程などについては前述した。

IV

それではこの orgueil と foi の対立関係は初稿 *Tentation* 以後の作品ではどのようになっているだろうか。

3つの types に分けることができると思われる。

- 1) Type I ① ↔ ② 別々の人物に orgueil と foi がそれぞれ具現されている。

[例]

Hérodias ↔ Saint Jean
Homais ↔ Bournisien
Apollonius ↔ Saint Antoine

但し Homais が Bournisien を嫌う理由には、≪ la vue d'un ecclésiastique lui était personnellement désagréable, car la soutane le faisait rêver au linceul, et il exérait l'une un peu par épouvante de l'autre.⁽³⁶⁾ ≫ という一節からもわかるように、次に述べる Type III の無意識に＜坊主＞を嫌悪する気持ちが含まれているが。

- 2) Type II

O	F
---	---

 同一人物に orgueil と foi が具現されているが、時間的に二つの時期に区分される。
(中世の聖人伝説などに多い)

[例]

Félicité (*Un Coeur simple*)
Saint Julien
Saint Antoine (moine になる以前の行状について - orgueil の時期一言及されている)

- 3) Type III

O
F

 同一人物に orgueil と foi が具現され、① = conscient, ② = inconscient のような

上下関係になる。(フロベール自身の心理構造にもっとも近い)

〔例〕

Emma Bovary

第1の Scénario でエンマはすでに修道院で教育を受けることが言及されているが、
---- «^{me} Bovary (Marie) (signe Maria, Marianne ou Marietta), fille d'un cultivateur aisé, élevée au couvent à Rouen (souvenir de ses rêves quand elle passe devant le couvent). Nobles amies, toilettes, piano⁽³⁷⁾ » (下線筆者) —— 修道院で教育を受けたことは Emma Bovary に orgueil と foi の葛藤をもたらす。

1) Emma fut intérieurement satisfaite de se sentir arrivée du premier coup à ce rare idéal des existences pâles où ne parviennent jamais les coeurs médiocres⁽³⁸⁾.

2) l'orgueil, la joie de se dire: « Je suis vertueuse », et de se regarder dans la glace en prenant des poses résignées, la consolait un peu du sacrifice qu'elle croyait faire⁽³⁹⁾.

このような自己満足は orgueil のために真実の foi を経験できないエンマの姿を現している。

そのエンマが宗教的な感情を経験する場面が二つある。

i) Angelus の鐘の音が一種の夢遊状態にさそう場面 —— 第2部第6章

この状態で Emma は無意識に司祭のところに走り、—— « elle avait l'air de quelqu'un qui se réveille d'un songe⁽⁴⁰⁾ » (下線筆者) —— あるいは修道女たちの祈りの列の中に confondue したいという願望をもつ。

ii) communion の場面

Son âme, courbatue d'orgueil, se reposait enfin dans l'humilité chrétienne⁽⁴¹⁾.

また≪ Un jour qu'ils (Emma et Léon) s'étaient quittés de bonne heure, et qu'elle s'en revenait seule sur le boulevard, elle aperçut les murs de son couvent⁽⁴²⁾ ≫のように、エンマは知らないうちに（無意識に）修道院に近づいている。

これらは、エンマ・ボヴァリーにとって foi は無意識の状態、あるいは orgueil の疲れはてた瀕死の状態にしか経験されえないものである、ということを意味しているのではないだろうか。

V

それではこの orgueil と foi は création にどのようにかかわっているだろうか。

Type II については *Un Coeur simple*, *Saint Julien l'Hospitalier* の scénarios とも簡略で、その création に果した役割のほどは解らない。

1) Type I について *Hérodias* の場合を例にとろう。

L'histoire d'Hérodias, telle que je la comprends, n'a aucun rapport avec la religion. Ce qui me séduit là-dedans, c'est la mine officielle d'Hérode (qui était un vrai préfet) et la figure farouche d'Hérode (qui était un vrai préfet) et la figure farouche d'Hérodias, une sorte de Cléopâtre et de Maintenon. La question des races dominait tout⁽⁴³⁾. （下線筆者）

このようにフロベールは≪ côtés politiques ≫を描きたいと述べ、また完成された作品では解りにくいのであるが—≪ Iaokanann l'empêchait de vivre [...] pourquoi sa (Saint Jean) guerre contre elle (Hérodias)? Quel intérêt le (St Jean) poussait? ≫としか最終稿では述べられていないし、St Jean が Hérodias

に投げつける ≪ces injures≫ の内容も明確にはされていない⁽⁴⁴⁾—— scénarios を見ると Hérodiad = orgueil ↔ St Jean = foi の対立関係が政治的な陰謀のかけにうすれていくのがわかる。

Hérodiad (orgueil)	St Jean (foi)
Mépris d'Hérodiad pour son mari	il l'avait (Hérodiad) attaquée comme inceste
Orgueil	(un jour passant devant lui en char) ⁽⁴⁵⁾
Haine frénétique contre Jean	

このように Hérodiad (O) と Saint Jean (F) の対立関係の上に、Hérodiad-Hérode (彼女のおじ、夫) 関係がつけ加わり、政治的側面がフロベールの création の過程に導入されたと考えられよう。

2) Saint Antoine と Apollonius の対立は初稿 *Tentation* 以来変わっていない。3度書き直された作品の中で不変の部分として、それだけフロベールの心を深くとらえていたのではないだろうか。

3) それでは Type III の *Madame Bovary* においてはどうか。

ところでフロベールの orgueil については Ferrère が ≪ce que l'orgueil fit de Flaubert en amitié, en amour, et dans les diverses circonstances de la vie littéraire⁽⁴⁶⁾≫について、性格の観点から述べているが、André Vial は *Le rire d'Emma Bovary (Le dictionnaire de Flaubert)* の中で、初稿 *Tentation* と *Madame Bovary* を比較し、≪La Tentation de 1849 marquait un progrès sensible dans ce qu'on pourrait appeler la genèse dérobée, inconnue de Flaubert lui-même, de ce qui serait un jour *Madame Bovary*⁽⁴⁷⁾≫と論じている。つまり聖アントニウスを誘惑する七大悪 (Volupté, Orgueil, Gourmandise, Envie, Colère, Paresse, Avarice) がエンマをも誘惑していることを指摘しているが、その中で orgueil が他の六つの悪徳以上の重要な役割を果たしていることに気づいているように思われる。≪orgueil, partout, auxiliaire complaisant des autres

ou leur adversaire ≧⁽⁴⁸⁾

一方、Gothot-Merschは*Mme Bovary*のscénariosについて、まず心理的動機付けにフロベールは重点をおいていると述べている⁽⁴⁹⁾。

また、フロベール自身初稿*Tentation*について次のように述べている。

C'est une œuvre manquée. Tu parles de perles. Mais les perles ne font pas le collier; c'est le fil. J'ai été moi-même dans *Saint Antoine* le saint Antoine et je l'ai oublié [...] Tout dépend du plan. *Saint Antoine* en manque; la déduction des idées sévèrement suivie n'a point son parallélisme dans l'enchaînement des faits. Avec beaucoup d'échafaudages dramatiques, le dramatique manque⁽⁵⁰⁾

従って orgueil と他の悪徳についても因果関係が見られるのではないだろうか。たとえば次の例に見られるように scénarios の段階では orgueil → colère の fil = causalité がはるかに明確になる。

Scénario 6 — [...] elle en veut à son mari de lui avoir fait le sacrifice d'un homme si supérieur [...] ⁽⁵¹⁾

最終稿 — Ce qui l'exaspérait, c'est que Charles n'avait pas l'air de se douter de son supplice. ⁽⁵²⁾ (下線筆者)

次に *Madame Bovary* の scénarios を見てみよう。(以下 S と略す)

S1ですでに修道院で教育を受けることが言及されていることは前述したが、
≪ élevée au couvent à Rouen (souvenir de ses rêves quand elle passe devant le couvent) Nobles amies, toilettes, piano ≧ (下線筆者), 一方、後の S60にも souvenir du couvent (S62も同様) という言葉がみられることから、この修道院という要素は作品創造においても大きな役割を担っているといえるだろう。

また S28で ≪ Emma se pose en victime, en martyre [...] Orgueil de la vertu ≧ (S31, 32も同様), S33で ≪ Idéal de l'ange [...] Orgueil de la femme honnête ≧ など㊶と㊷が接近して登場するのも対立関係を示唆しているのではないだろうか。

foi は初期の scénarios 段階では示されているのに、次第に消えていくのも特徴

といえるだろう。

例えば《vie pécheresse》という言葉は S 1, S 3, S 6 にはあるのに, S 9 以後では, 直後の《Le besoin du mensonge》の中に吸収されてしまったかのようである。

また《idées religieuses》は S 6, S 9, S 33, S 36, S 38, S 45 には見られるのに S 47 以後は前後の《Communion dans son lit, visions de Fiesole, sentiments de sirops et de mièvreries religieuses》に吸収されてしまったかのようである。

レオンに対する愛に関して 《Emma ne se cache plus qu'elle l'aime, mais se pose en martyre》(S 31) (S 27, S 28, S 31, S 32 も同様) だったのが, S 33 では《(Emma) Repousse Léon, par des faits》(下線筆者) となり, 《martyre》という言葉は消えうせてしまう。この言葉は一貫してフロベールの創作活動を支えているが＜具体的な事実＞の下に姿をかくしてしまうかのよう。

《ascétisme》という言葉に関しても同様である。レオンがパリへ去った後のエンマにとって《Re-Tostes!》の日々が始まる。《Besoin d'ascétisme》(S 32) — この言葉は S 36 では《Santé》にとって代われ, (その前に《caprices》《(Elle) Se ravale à plaisir/lâche des sottises》(S 33, S 36) の章があるが) 《Inquiétudes de Charles》へという方向をたどる。

このように foi の問題は想像以上に *Madame Bovary* の création にかかわっているように思われる。フロベールの Emma Bovary に対する皮肉な style にとられすぎてはならないだろう⁽⁵³⁾。

l'idée première que j'avais eue était d'en faire une vierge, vivant au milieu de la province [...] J'ai gardé de ce premier plan tout l'entourage [...], la couleur enfin. Seulement, pour rendre l'histoire plus compréhensible et plus amusante, au bon sens du mot, j'ai inventé une héroïne plus humaine, une femme comme on en voit davantage⁽⁵⁴⁾. (下線筆者)

フロベールのこのような手紙は foi から具体的事実への移行を示唆しているのではないだろうか。

orgueil と foi がフロベールに絶えずつきまとっているのは、mystique になり切れないフロベールの苦悩を表しているのではないだろうか。《Sans l'amour de la forme j'eusse été peut-être un grand mystique⁽⁵⁵⁾》

それではフロベール自身はこの対立関係を aufheben していくことができると考えているだろうか。

Je suis descendu en courant au bord de la mer, à travers les terrains éboulés que je sautais d'un pied sûr; je levais la tête avec orgueil, je respirais fièrement la brise fraîche, qui séchait mes cheveux en sueur; l'esprit de Dieu me remplissait, je me sentais le coeur grand, j'adorais quelque chose d'un étrange mouvement, j'aurais voulu m'absorber dans la lumière du soleil et me perdre dans cette immensité d'azur, avec l'odeur qui s'élevait de la surface des flots; et je fus pris alors d'une joie insensée, et je me mis à marcher comme si tout le bonheur des cieux m'était entré dans l'âme⁽⁵⁶⁾.

このようにフロベールは <mystique> な経験を述べているが、この神秘的な体験が《回心》とならず 一つの souvenir, sentiment religieuxにとどまる場合、止揚は考えられないのではないだろうか。フロベールは続けて書いている。

Puis ce fut tout; bien vite je me rappelai que je vivais, je revins à moi, [...] Je revins le soir chez nous, je repassai par les mêmes chemins, je revis sur le sable la trace de mes pieds et dans l'herbe la place où je m'étais couché; il me sembla que j'avais rêvé. Il y a des jours où l'on a vécu deux existences, la seconde déjà n'est plus que le souvenir de la première⁽⁵⁷⁾.
(下線筆者)

すでに述べた *Madame Bovary* における communion の場面でも、瀕死の重態におちいったエンマは foi を獲得したと思いこむが、病気が回復するに従って思い出だけを残して、その体験はうすれていく⁽⁵⁸⁾。まるで orgueil は生きている限り決してとり除きうるものではない、生命そのものであると主張しているかのように。

フロベールにとって、この対立関係こそが真実だったのではないだろうか。

註

- 1) *Oeuvres complètes*, Club de l'Honnête Homme, t. 15, p. 458
(1876年6月19日 ロジェ・デ・ジュネット夫人あて)
- 2) A. Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p. 89
- 3) R. Descharmes, *Flaubert, sa vie, son caractère et ses idées avant 1857*, Ferroud, 1909, p. 90
- 4) *Oeuvres complètes*, t. 12, p. 478 (1846年8月6日 ルイーズ・コレあて)
- 5) *Ibid.*
- 6) *Op. cit.*, pp. 89-91
- 7) C. Gothot-Mersch, *La Genèse de Madame Bovary*, Slatkine Reprints, 1980, p. 104
- 8) M. J. Durry, *Flaubert et ses projets inédits*, Nizet, 1950, p. 157
- 9) C. Gothot-Mersch, «*Portraits en antithèse dans les écrits de Flaubert*», dans *Essais sur Flaubert*, Nizet, 1979, pp. 285-311
なお作品の中に見られる二項性については A. Naaman が言及している。
(A. Naaman, *Les Débuts de Gustave Flaubert et sa technique de la description*, Nizet, 1962, pp. 333-334, pp. 356-358)
- 10) *Oeuvres complètes*, t. 9, p. 457
- 11) *Ibid.*, p. 474
- 12) *Ibid.*, p. 468
- 13) *Ibid.*, p. 471
- 14) *Ibid.*, t. 11, p. 269
- 15) «vanité» という言葉が一度だけ登場する。
- 16) *Oeuvres complètes*, t. 11, p. 527
- 17) 畠中尚志訳『エチカ』岩波文庫(下) p. 114 (Dieu est exempt de passions et n'est affecté d'aucune affection de Joie, ou de Tristesse — *Ethique*, par Lantzenberg, Flammarion, p. 317)
- 18) *Oeuvres complètes*, t. 11, p. 529
- 19) 『エチカ』(上) p. 76 (Dieu n'agit pas de par la liberté de sa volonté — *Ethique*, p. 47)
- 20) 前二者以外に次のようなものが挙げられよう。
 - a) 無限性に関して
retrancher à Dieu une portion de lui-même, c'est nier Dieu (t. 9, p. 65)

l'illimité n'est pas sujet à la mesure, l'éternité n'a point de durée, Dieu ne se classe pas en parties. (t. 9, p. 220)

〔第1部定理13, 15備考, 定理8〕

b) 善悪の相対性

Le bien, pour l'âne, n'est-ce pas le chardon vert? [...] Mais pour le chardon, le mal c'est l'âne qui le croque [...] (t. 9, p. 63)

〔善とは、それが我々に有益であることを我々が確知するもの、と解する——

第4部定義1〕

c) déterminisme

le grain de sable qui crie sous ton pied est le produit complexe de mille créations éteintes; la pensée qui te survient maintenant, elle a été amenée jusqu'à toi, et au degré qu'elle a, par des successions, des gradations, des transformations et des renaissances (t. 9, p. 221)

〔第1部定理28〕 etc.

- 21) *Ethique*, p. 270 〔第4部定理55〕
- 22) *Ibid.*, p. 53 〔第1部付録〕
- 23) *Oeuvres complètes*, t. 11, p. 526
- 24) *Ibid.*, P. 534
- 25) *Ibid.*, t. 9, p. 176
- 26) 畠中訳『エチカ』(下) p. 48 〔第4部定理37備考〕
- 27) *Oeuvres complètes*, t. 12, p. 503 (1846年8月26日 ルイーズ・コレ宛)
- 28) *Ibid.*, t. 13, pp. 94-95 (1850年11月14日 ルイ・ブイエ宛)
- 29) J. P. Sartre, *L'Idiot de la Famille*, Gallimard, 1971, p. 542
- 30) *Ibid.*, p. 537
- 31) *Ibid.*,
- 32) P. M. Wetherill, *Flaubert et la création littéraire*, Nizet, 1964, pp. 104-106
M. Reboussin, *Le drame spirituel de Flaubert*, Nizet, 1973
- 33) «Novembre», dans *Oeuvres complètes*, t. 11, p. 627
- 34) *Ibid.*, t. 13, p. 184 (1852年4月24日 ルイーズ・コレ宛)
- 35) *Ibid.*, p. 265 (1852年12月9日 ルイーズ・コレ宛)
- 36) *Madame Bovary*, Garnier, p. 330
- 37) *Oeuvres complètes*, t. 1, p. 435 (pianoの社会的な意味についてはJ. Neefs,

Madame Bovary de Flaubert, Classiques Hachette, 1972, p. 39)

- 38) *Madame Bovary*, Garnier, p. 40
- 39) *Ibid.*, p. 111
- 40) *Ibid.*, p. 117
- 41) *Ibid.*, p. 219
- 42) *Ibid.*, p. 289
- 43) *Oeuvres complètes*, t. 15, p. 458 (1876年6月19日 ロジェ・デ・ジュネ
ット夫人宛)
- 44) *Ibid.*, t. 4, p. 258
- 45) *Ibid.*, p. 487, p. 493, p. 499
- 46) Ferrère, *Esthétique de Gustave Flaubert*, Slatkine Reprints, Genève,
1967, p. 13
- 47) André Vial, *Le rire d'Emma Bovary (Le dictionnaire de Flaubert)*, Nizet,
1974, p. 34
- 48) *Ibid.*, p. 38
- 49) C. Gothot-Mersch, *La Genèse de Madame Bovary*, pp. 124-129
- 50) *Oeuvres complètes*, t. 13, p. 165 (1852年2月1日 ルイーズ・コレ宛)
- 51) *Ibid.*, t. 1, p. 447
- 52) *Madame Bovary*, Garnier, p. 111
- 53) たとえば ≪... sacrifice qu'elle croyait faire≫ (*Ibid.*, p. 111)
- 54) *Oeuvres complètes*, t. 13, p. 570
(1857年3月30日 ルロワイエ・ド・シャントピー嬢宛)
- 55) *Ibid.*, t. 13, p. 274 (1852年12月27日 ルイーズ・コレ宛)
- 56) ≪Novembre≫, *Ibid.*, t. 11, p. 632
- 57) *Ibid.*, pp. 632-633
- 58) *Madame Bovary*, Garnier, pp. 219-222